

# 人は今、なぜ「聖地」へ向かうのか

## —聖地巡礼から巡礼ツーリズムへ—

### 1 はじめに

現代の「聖地巡礼」は、宗教学とツーリズム研究の出会いと交流の場となりつつある。

現代宗教、とりわけ聖地などを論じる場合には、ツーリズムの全域化が念頭におかれるべきであり、そうした状況を意識せずに「聖なるもの」を手放しで称揚することには、あまり賛成できない。その意味で、ツーリズム研究は、宗教学研究の重要な語彙である「聖なるもの」の今日的な異相を眺めてみるためには有効な視座ではないかと思っている。(山中弘編 (2012)『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社)

#### 1.1 宗教の役割

##### (1) 宗教の定義 <sup>\*1</sup>

- a. **実体的定義**: 人間や自然を超えた超経験的、超自然的な存在に対する信念や実践。(キリスト教、イスラム教、仏教等)
- b. **機能的定義**: 「病や死、生きることの意味など人間の「限界状況」に深く関わる諸問題」への答えとして、「究極的意味の供給」や「究極的問題への処理」などの機能を果たすもの。<sup>\*2</sup>

#### 1.2 これまでの講義のおさらい

##### (2) 「聖地」とは何か?—通時的考察

- a. 「聖なる価値」を与える主体の変化
- b. 人が「聖地」に求めるものの変化

##### (3) 「聖なる価値」を与える主体の変化

- a. 組織・制度の変遷: 教会から国家、国家から国際組織へ
- b. 個人化: 組織・制度から小集団・個人へ

##### (4) 人が「聖地」に求めるものの変化

- a. 「神」から「国家的価値」、「国家的価値」から「普遍的価値」<sup>\*3</sup>
- b. 「大きな神」(一神教の超越神) から「小さな神々」へ、「小さな神々」か「関係」へ

---

<sup>\*1</sup> 山中編 (2012:8) を参照のこと。

<sup>\*2</sup> 宗教とは「前提を欠いた偶発性」に馴致させる仕組みのことです。端的なこと、条件をつけられないこと、どうにもならない不条理を、受け入れ可能にするメカニズムの総体が宗教であるということです。(宮台 2009:122)

<sup>\*3</sup> 世界遺産認定の Outstanding Universal Value。

## 2 サンティアゴ・デ・コンポステラの聖地巡礼ツーリズム

何故、サンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼に注目するのか？それは、1990 年半ばから、全く新しいタイプのサンティアゴ巡礼者が急速に増えており、彼らの巡礼行動に現代の「聖地巡礼」の特性が色濃く反映されているから。

### 2.1 サンティアゴ・デ・コンポステラとは？

- (5)
- a. スペイン北西部、ガルシア州の州都
  - b. ローマ、エルサレムに並ぶカトリック教徒の三大巡礼地の一つ
  - c. 聖ヤコブ (Santiago, Saint-Jacques) の遺骸がサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂に祭られている
  - d. 聖ヤコブとは (ゼベダイの子)
    - 新約聖書に登場するイエスの十二使徒の中の最後の殉教者でヨハネの兄
  - e. 地名の由来 (ある言い伝え) : Campus Stellae: “field of the star” (パウロ・コエーリョ 『星の巡礼』 (角川文庫)、英語 『星の旅人たち』)

### 2.2 サンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼の特徴

- (6) 聖地巡礼の歴史 \*4
- a. **9 世紀：奇蹟的にヤコブの遺骸が発見され、アルフォンソ 2 世純潔王によって同地に最初の聖堂が建設された**
  - b. 11～12 世紀：エルサレムやローマへ巡礼が危険が高まる→サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼が盛んになる
  - c. 13～14 世紀：ベネディクト会、クリュニー会といった修道院や様々な騎士団が巡礼道や巡礼のための施設を整備・拡充 (**最盛期の巡礼者は年間 50 万人**)
  - d. **15 世紀以降：巡礼者が激減** (ペストや百年戦争、海賊によるガリシア沿岸襲撃→聖ヤコブの遺骸が行方不明)
  - e. 1879 年：サンティアゴ大司教による遺骸発見プロジェクト
  - f. 1884 年：祭壇天井裏から骨壺が発見され、教皇レオ 13 世がヤコブのものと認定
  - g. しかし、その後も巡礼者は増えず (1986 年の巡礼証明書の発行数は 2500 人まで届かず)
  - h. **1990 年半ば：巡礼者が目に見えて増加し始める**
    - 1987 年：パウロ・コエーリョによる小説『星の巡礼』 (*O Diário de um Mago*) の出版
    - **1993 年：ユネスコの世界遺産に認定**
    - 2000 年：シャーリー・マクレーンの巡礼記『カミーノ—魂の旅路』 (*The Camino: A Journey of the Spirit*) が出版
    - 2005 年：フランス映画『サン・ジャックへの道』 (*Saint Jacques...La Mecque*)
    - 2010 年：アメリカ=スペイン合作映画『星の旅人たち』 (*The Way*)

\*4 岡本 (2012:184-188)

(7) 現在のサンティアゴ巡礼の実態 <sup>\*5</sup>

## a. 巡礼のルートと距離

- **カミーノ・フランセス (フランス人の道)** (サン・ジャン・ピエ・ド・ポーを起点とする 800km の行程)
- ポルトガル人の道
- 北の道
- 銀の道

## b. 巡礼の方法

- 徒歩による巡礼 (30~40 日) : 93953 人 (82 % : 2007 年統計)
- 自転車巡礼 (10 前後も可能) : 19702 人 (約 17 %)
- 馬による巡礼 : 364 人
- 車椅子による巡礼 : 7 人

## c. 巡礼者の年齢

- **18~29 歳 : 約 3 割**
- **30~54 歳 : 約半数**
- 18 歳未満 : 約 1 割
- 55 歳以上 : 約 1 割

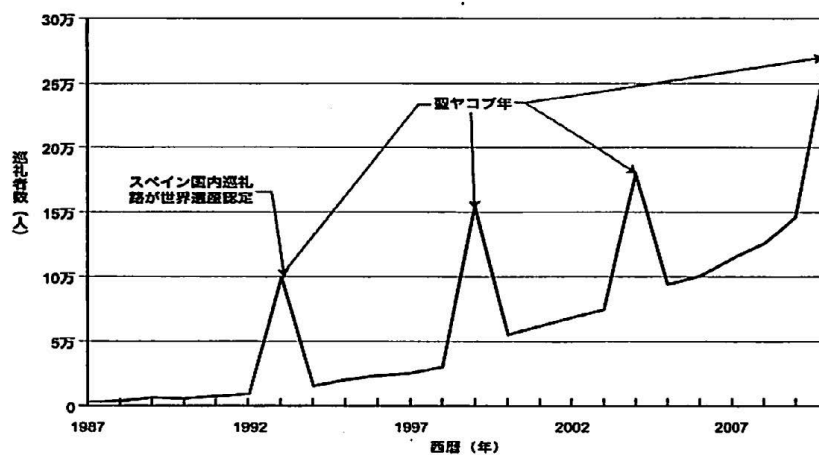
## d. 巡礼者の性別と国籍

- 男女比は、男性 3 : 女性 2
- 国籍はスペイン人 45 %、非スペイン人 55 % (120 カ国以上)

## e. 年間巡礼者数

- 2004 年の巡礼証明書授与者 : 18 万人
- サンティアゴの宿泊施設の利両者 : 600 万人以上

## f. 年間巡礼者数の推移



◇年間巡礼者数の推移 (1987~2010)  
(サンティアゴ巡礼事務所の発表を元に筆者が作成)

表 1 : 岡本 (2012:188) の集計 <sup>\*6</sup>

<sup>\*5</sup> 岡本 (2012:189-220)

<sup>\*6</sup> 聖ヤコブ年 : 聖ヤコブの祝日である 7 月 15 日が日曜日にあたる年。周期は、6 年、5 年、6 年、11 年。次の聖年は 2021 年。

## g. 宿泊—アルベルゲとオスピタレロ

- アルベルゲ (Albergue) : 2~4 段ベッドとシャワーが基本的設備の巡礼者専用の宿泊施設 (基本、素泊り) で、宿泊料金は公営で 10 ユーロ前後、市営で 10~15 ユーロ。巡礼者同士の主要な交流場所のひとつ。
- オスピタレロ (Hospitalero) : アルベルゲを管理し、巡礼者のお世話をする人。
  - \* オーナー型 : アルベルゲの「所有者」で、商売としてアルベルゲを経営する。
  - \* ボランティア型 : 巡礼体験者が、自分の巡礼体験を元に巡礼者に助言したり簡単な治療を行ったりしながら、2 週間から 1 ヶ月程働くケースが多い。

## h. クレデンシャルと巡礼証明

- クレデンシャル (Credential) : 巡礼車の身分を証明するための「パスポート」で、立ち寄った巡礼宿やレストランでスタンプを押す。
- 巡礼証明書 (Compostelano) : 徒歩で 100km 以上、自転車で 200km 以上という条件を満たしていれば、サンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼事務所発行してもらえる。

### 3 サンティアゴ巡礼者は、今何を求めて旅するのか？

## (8) 「聖地への到着」から「他者との交流」へ

[1990 年代半ば以降、サンティアゴ巡礼者の] 巡礼体験の真正性や意味は目的地であるサンティアゴ・デ・コンポステラへの「到着」よりも、そこへ至までの「プロセス」で生じる他者との交流の中に見いだされる傾向が強い。<sup>\*7</sup>

#### 3.1 映画『星の旅人たち』の巡礼者たち

## (9) 映画『星の旅人たち』(The Way)

- a. 2010 年公開 (日本は 2012 年) の米西合作映画
- b. サンティアゴ巡礼の初日に命を落とした息子 (ダニエル) に代わり、遺品となった息子の装備を身につけ、「聖地巡礼」の旅に出た父親 (トム) と巡礼仲間たちとの交流を描いた映画。
- c. サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路 (フランスの道) を背景に、トムと 3 人の見知らぬ旅人たちとの出会いと交流という「他者との関わり」がテーマ。

## (10) トム・エイヴリーと三人の同行者たち

- ヨスト : オランダ人の若者で、巡礼の表向きの動機は「減量」
- サラ : オランダ人のヘビースモーカーで、巡礼の表向きの動機は「禁煙」(実は夫の DV で娘と離ればなれになっている)
- ジャック : アイルランド人の作家で、スランプから抜け出そうと巡礼に参加

## (11) トムのサンティアゴ巡礼のいくつかの重要なポイント

- a. トムは時折、息子ダニエルの姿を巡礼路に見つける→トムにとってはダニエルの遺灰を運ぶ「追悼

---

<sup>\*7</sup> 岡本 (2012:259)

の旅」\*8

- b. トムと仲間たちの中で、信仰心の強い者はだれ一人いない→宗教的な巡礼ではなく個人的な旅 (“The Way” is a private one.)
- c. 見知らぬ他者との出会いから関係が生まれ、＜他者との関わり＞こそが巡礼行動をその都度動機づけている
- d. サンティアゴ巡礼での＜他者との関わり＞の体験が（ダニエルを通して）トムに自己変容をもたらす（イスラムを旅するシーンで映画が終わる）

### 3.2 神から自己、自己から関係へ：「他者との出会い」の場としてのサンティアゴ巡礼路

(12) 「現代」のサンティアゴ巡礼に見られる二つの「他者関係」について

- a. ホスト（オスピタレロ）とゲスト（巡礼者）の＜共犯関係＞\*9
- b. **ゲストとゲスト（巡礼者同士）の関係**\*10

(13) ポスト世俗化の時代のサンティアゴ巡礼者にとっての「聖性」

- a. 神聖なのはサンティアゴという聖地そのものではなく、そこへの道程を通じて「聖化された自己」なのである（「特別な自分」探し）
  - b. 世界のどこかに自分と同じような新しい靈性を抱く人がいるという想い（スピリチュアリティを通じた匿名の他者との連帯）
  - c. サンティアゴ巡礼者のための同好会やサークルが世界中に無数に存在し、インターネットでの情報交換が世界規模で行われている（共通の趣味を通じた匿名の他者との交信）
- ☆ 上記を背景に、聖ヤコブの求心性が後退し、歩くプロセスそのものが極めて重視されている  
→「歩く」という行為の裏で欲望されているものは何か？

(14) 「他者との出会い」の場としてのサンティアゴ巡礼路

- a. サンティアゴ巡礼路では、距離も踏破するのに費やす時間も例外的に長い（約 800km を一日 20～30km で 1 ヶ月程歩く）
- b. 巡礼路では、生きることが「根本まで切り詰められる」不便で危険で過酷な巡礼生活を余儀なくされる
- c. 自分の「身体的・精神的苦難は他の巡礼者にも共有されている」はず、という「他者とのつながり」の感覚
- d. 道中であつた見知らぬ他者との協働を通じての信頼の醸成
- e. 「巡礼路に眠る死者を自らでもありえたとおぼせる」偶有性の感覚

(15) 現代サンティアゴ巡礼体験が生み出す＜弱い信仰者＞たち

このようなボランティア的利他性を通じたつながりの重視からは、現代サンティアゴ巡礼において＜弱い信仰者＞が生まれつつあることが予感されないだろうか。制度的に規定された教義・教理や自らの至高の自律性の下で組み上げた私秘的信念からの逸脱の有無をチェックしていれば自らの宗教的真正性を

\*8 弘法大使ならぬ故ダニエルとの「同行二人」。“We’ll be leaving in the morning, two of us.”

\*9 ホスト・ゲスト間の交流で重視されているのは＜本来そうあるべき巡礼のイメージ＞である。（岡本 2012:216）

\*10 岡本（2012:220-235）を参照のこと。

確信できるあり方を〈強い信仰者〉だとすれば、非カトリック信徒のサンティアゴ巡礼者のあり方は、意味体系を一時的に正当化してくれる強い審級をもたないため、自らが奉じる信念を他者や集団との交流の中で不断に問い直して再構築しつづける〈弱い信仰者〉として対置できるのではないだろうか。言い換えれば、**超越的に恵与される宗教原理の遵守ではなく、他者との継続的な相互作用の中で巡礼体験の意味を再構築していこうとする態度**である。<sup>\*11</sup>

- (16) 〈弱い信仰者〉たちに芽生える共同性・親密性の新たな形  
そしてその意味で、**ボランティアとして自らを開きながら他者と接するような交流の展開が、つまり、私事化の後に新たな共同性・親密性を織り成そうとする試みの地平**こそが、ポスト世俗化の独特の宗教空間としてのサンティアゴ巡礼路だと考えられるのではないだろうか。<sup>\*12</sup>
- (17) 〈弱い信仰者〉としての巡礼体験の意義  
自分は「他者（死者を含む）」との関係の網に埋め込まれた存在であることを体感することで、自己を他者へ向かって開く構えが備わる。→ 共同性や親密性の新たな構築の試み
- (18) 「中心」から「他者」へ (Cohen 1992a)  
a. 巡礼 (pilgrimage) は「中心」(the sacred center) へ向かう動き  
b. 旅 (tourism) は「他者」(the Other) へと向かう動き
- (19) 「聖地巡礼」の動機・目的  
a. 神のもとへ (超越なるものへ) → 「他者との出会いと交流」(他者、関係の網)  
b. 聖地巡礼→巡礼ツーリズム (「聖地巡礼」のツーリズム化)

## 4 今なぜ、「関係」(絆) が求められるのか?—「超越なるもの」の系譜から考える

### 4.1 戦後日本社会のリアリティの変容

- (20) 「現代」とはどのような時代か?—近代社会から未来社会への移行期  
I: 原始社会 (定常期)  
I → II: 軸の時代 (過渡期)  
II: 文明/近代社会 (爆発機)  
II → III: 現代社会 (過渡期)  
III: 未来社会 (定常期)
- (21) 現代日本社会の「宗教回帰」(1980 年代)  
日本が近代社会を目指しだしてから、三度の宗教ブームが起こったとされています。1 回目は幕末、二回目は第二次世界大戦後、三度目が 1980 年あたりから起こった「宗教回帰現象」です。この「宗教回帰現象」という呼び名は、1984 年に NHK 放送世論調査所が名づけました。(内田樹・釈徹宗 2010:149)

\*11 岡本 (2010:21)

\*12 岡本 (2010:22-23)

- (22) 見田 (1995、2007) の提案
- a. 理想の時代 (1945-1960)
  - b. 夢の時代 (1961-1975)
  - c. 虚構の時代 (1976-1990)
- (23) 大澤 (1996、2008) の修正案
- a. 理想の時代 (1945-1970)
  - b. 虚構の時代 (1971-1995)\*<sup>13</sup>
  - c. ポスト虚構の時代 (1996-)\*<sup>14</sup>
- (24) 「超越なるもの」の変遷—戦後日本社会の凶悪犯罪の系譜を例に
- a. 理想の時代：近代の理念 (国民国家、科学技術、政治イデオロギー等)
  - b. 虚構の時代：捏造された「神」(オウム真理教：再魔術化)
  - c. ポスト虚構の時代 1：自分一人だけの「神」(酒鬼薔薇聖斗のバモイドオキ神：個人化の徹底)
  - d. ポスト虚構の時代 2：「関係」(加藤智大の匿名ネット掲示板：「神」から「関係」へ)

## 4.2 はたして「他者／関係」は「神」の空位を代位できるのか？

- (25) 現代における「他者／関係」の前景化
- a. 人間関係の嗜癖 (共依存) (シェフ 1993)
  - b. フルタイム・インティメット・コミュニティ
  - c. 繋がりの社会性 (北田 2005)
  - d. 「まなざしの地獄」から「まなざしの不在の地獄」へ
- (26) 「他者／関係」への過剰な期待
- a. 東日本大震災後の「絆」の大合唱
  - b. ソーシャル・メディアへの期待
  - c. 「シェア」文化の広がり
- **上滑りする他者関係**
- (27) 現代の「他者／関係」問題を考えるヒント
- a. 真木 (2003) の「感情的記憶の奇蹟」(現在の瞬間の中に持続をよみがえらせる) (記憶の環境／他者依存性)
  - b. 身体の「間身体性」(身体こそが他者性の契機)\*<sup>15</sup>
  - c. 「サンティアゴ巡礼ツーリズム」から学ぶ
    - － 他者／環境と強く結びついた体験 (過酷な巡礼路での非日常的体験)
    - － 身体を媒介した交流 (1ヶ月以上もの期間寝食を共にする)

\*<sup>13</sup> 理想の時代から虚構の時代の転換点として、大澤は日本万国博覧会 (大阪万博) をあげている。この転換期の代表的な出来事、とりわけ理想の時代の終焉を象徴する出来事として、三島由紀夫の自決 (1970) や連合赤軍事件 (1972) がある。

\*<sup>14</sup> 大澤 (2008) ではこの時代を、「不可能性の時代」と呼んでいる。東 (2001) では「動物の時代」、宮台 (2010) は「自己の時代」、宇野常寛大 (2011) は「拡張現実の時代」と名付けている。

\*<sup>15</sup> (村田 2007) および鷲田 (1998) を参照。

— 他者とのほどよい距離感(「自分と向き合う」だけの適度に孤独な時間)

(28) <弱い信仰者>としての巡礼体験の意義

自分は「他者(死者を含む)」との関係の網に埋め込まれた存在であることを体感することで、自己を他者へ向かって開く構えが備わる。→ 共同性や親密性の新たな構築の試み



## 参考文献

- 石牟礼道子・藤原新也 (2012) 『なみだふるはな』河出書房新社
- 内田樹・釈徹宗 (2010) 『現代靈性論』講談社
- 大澤真幸 (1996) 『虚構の時代の果て—オウムと世界最終戦争』ちくま新書
- 大澤真幸 (2008) 『不可能性の時代』岩波新書
- 岡本亮輔 (2010) 「聖地巡礼における〈まなざし〉と〈つながり〉—現代サンティアゴ巡礼者の利他性と〈弱い信仰者〉」『宗教学・比較思想学論集』(宗教学・比較思想学論集)
- 岡本亮輔 (2012) 『聖地と祈りの宗教社会学—巡礼ツーリズムが生み出す共同性』春風社
- 北田暁大 (2005) 『嗤う日本の「ナショナリズム」』NHK ブックス
- Giddens, Anthony (1991) *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*. Stanford Univ.Press. (『モダニティと自己アイデンティティ—後期近代における自己と社会』秋吉美都、安藤太郎、筒井淳也訳、ハーベスト社、2005)
- Cohen, Erik (1992b) "Pilgrimage and Tourism: Convergence and Divergence," *Sacred journeys : the anthropology of pilgrimage*, edited by Alan Morinis, Greenwood Press,47-61.
- Cohen, Erik (1992b) "Pilgrimage Centers: Concentric and Excentric," *Annals of Tourism Research*, Vol. 19, 33-50.
- シェフ、アン・ウィルソン (1993) 『嗜癖する社会』(斎藤学) 誠信書房
- 中島岳志 (2011) 『秋葉原事件—加藤智大の軌跡』朝日新聞出版
- 真木悠介 (2003) 『時間の比較社会学』岩波現代文庫
- 見田宗介 (1995) 『現代日本の感覚と思想』講談社学術文庫
- 見田宗介 (2006) 『社会学入門—人間と社会の未来』岩波新書
- 見田宗介 (2008) 『まなざしの地獄』河出書房新社
- 宮台真司 (2009) 『日本の難点』幻冬舎新書
- 村田純一 (2007) 『「わたし」を探検する』(双書 哲学塾) 岩波書店
- 山中弘編 (2012) 『宗教とツーリズム—聖なるものの変容と持続』世界思想社
- Lennon, John and Malcom Foley (2001) *Dark Tourism*. International Thomson Business Press.
- 鷲田清一 (1998) 『悲鳴をあげる身体』PHP 新書